

SENDプログラムの現状と課題

—シンガポール国立大学の場合—

ウォーカー 泉¹・齋藤 亨子²・浜崎 譲³

キーワード

SEND プログラム 授業見学 模擬授業 短期日本語集中プログラム
グローバル人材

1. はじめに

シンガポール国立大学は、1905年の創立以来、サイエンスやエンジニアリング、法律、医学、社会人文系の分野を備える総合大学として発展してきた。2012年にはQS世界大学ランキングで25位（アジア2位）、語学教育では世界9位に位置づけられ、東南アジア諸国、中国、欧米やヨーロッパなど100ヶ国以上の大学と提携を結んでいる国際色豊かな大学である。その発展の基盤には、多大な研究成果に加えて、教育の質の向上を目指したシステムの構築がある。例えば、頻繁に開催される全学の教員を対象に教育セミナーやワークショップ、量的・質的両面から教師の資質や授業の成果を測る学生による授業評価制度や、学科を越えて教員間で行うピアレビュー、学科・学部・全学レベルでの優秀教授賞受領者の選出、全教員に定期的にポートフォリオの提出を義務付けるなどという制度が修正を重ねながら確立されてきた。

そのような中、SENDプログラムは、人文社会科学部に属する語学教育研究センター⁴の日本語プログラム（以下、「本プログラム」）で開始されることとなった。本プログラムは1981年に開講され、全外国語履修者の4分の1にあたる約1,400名の学部生と院生を対象に約30名の教員が日本語教育を行っている学内の12言語の中で最も歴史が長く大きなプログラムである。

日本語コースは、「日本語1」と言う、いわゆるゼロ初級者レベルから、「日本語6」と言う日本語能力試験N2程度のレベルまでの6コースの他に、ビジネス日本語やメディア日本語などがある。語学は選択科目の一つにすぎず、履修者の専攻も多様であるが、学生たちは極めて熱心に日本語学習に取り組んでいる。しかしながら、厳しい成績競争や専門科目との両立の困難さにより、学習の継続を断念してしまう学生も少なくないため、学習意欲を高め、言語運用能力を効率よく向上できるような教育の実践が継続的な課題となっている。特に、「日本語1」では、約400名の学習者を対象に10名以上の教師がティームティーチングを行っているが、個々の学習者に平等な学習機会を与えなければならない

め、共通教案、教材を用いて授業を行っている。また、シンガポールでは成績が一生を決めるほど重視されていることから、平常点、宿題、クイズから試験に至る全ての評価が、厳正かつ公平に行われなければならない。そのような事情、また、全授業が授業評価の対象となっていること、さらに、学生からの授業に対する期待が極めて高いことなどから、SEND プログラム参加者が教師に代わって授業を行ったり、特定のクラスだけで交流機会を持つなどということが許されない状況にある。また、日本語の教員は最大数の学習者を抱えながら、授業のみならず、学術雑誌「e-FLT」⁵の刊行や、言語教育国際大会「CLaSIC」⁶の開催など、世界の外国語教育へも貢献すべく多様な仕事が課されているため、極めて多忙な毎日を送っている。そのような制約の大きい現場ではあるが、SEND プログラムにできる限り貢献できるよう努めてきた。以下にその概要を報告し、よりよい成果に繋げるための提言を試みる。

2. 1 派遣学生・院生の受け入れに関する報告

本プログラムは、SEND プログラム開始年の2013年2月には大学院生7名、2014年2月には大学院生1名、学部生2名の研修生を受け入れている。研修内容の構成については、研修生が通常コースの授業では教壇実習ができないという本校の制約があるものの、現場で必要な教師としての資質・能力・態度を養ってもらう意図から、研修生自らが計画・準備した模擬授業、いわゆる教壇実習を行うことを中心に、次の三つの研修内容を設定した。その三つとは、1) 授業見学、2) 模擬授業（文化活動）の準備と実施、3) 受け入れ先コースの補助業務（採点、授業内での会話パートナー、学生からの質問に答える「ヘルプデスク」など）である。研修内容には、当然、本プログラムが志向する、現場が求める教師像が反映されることになる。求められる教師像、すなわち日本語教師の資質について、横溝（2002）は「人間性」「専門性」「自己教育力」に分けられると言う。ここでは、この三つの資質を固定的・個別的に捉えるのではなく、より流動的な資質・能力・態度の融合ととらえ、便宜上「教師力」と呼ぶことにする。そして、本プログラムが考える教師像を、「現場が組織としてどう動いているのか、学習者はその中でどのような特色があり、どんなニーズを持っているのか、を把握した上で、学習者の興味や能力をさらに引き出し、学習動機を高められるような、自ら考え実行できる自立・自律した教師」とする。以下、特に上記1)と2)に限って内容を述べ、最後に成果と課題をまとめる。

2.1 授業見学

先にも述べたが、本プログラムでは多くの学生を抱えているため、いかに効率よく組織的にコースを運営するかが課題となっている。そのため、研修の最初には、そうした点で特色のある現場を知ってもらい、3週間目の教壇実習の準備の一環として、様々なレベルのコースをできる限り見学してもらった。また、見学クラスによっては、ペアワークの相手役としてクラスに参加することもあった。見学中は、授業を批判的に検討してもらうために、本プログラムで活発に行われているピアレビュー（教師同士の相互授業見学と振り返り）と同様、研修生には見学した授業の内容・構成、指導方法、学生の様子以外にも、

自分が学んだことや、自分が教師だったらどうするかなどを振り返りシートに記入してもらい、見学後に見学したクラスの教師へのフィードバックをしてもらった。

この授業見学という研修内容に関して特筆すべきは、日本人研修生と外国人研修生との間での現場のやり方に対する反応に大きな差があったことであろう。例えば、初年度の日本人研修生たちは、研修当初、既知の日本語教育の方法や自分が好む教授法などとの違いに戸惑っているのか、本プログラムの現場でのやり方、特に初級コースにおいてはドリル練習が多いことなどコントロールされた練習内容に批判的な見方をしていた一方で、外国人研修生（アジア系留学生）達は、母国で日本語を学んだときを思い出したと現場でのやり方に肯定的な見方をしていた。現場をどう受け止めるかについては、その後、三週間目の模擬授業をする頃には大きく変わっていった。それについては2.3で研修の成果として述べる。

2.2 模擬授業

研修の三週間目が本校での中間休みに当たるため、その期間に研修生が自ら計画・実施する模擬授業（教壇実習）を行ってもらった。研修生の興味や学びたいことを考慮しつつ、本プログラムが希望する模擬授業の内容の枠組み（例：初級コースの学生を対象にした文字指導など）とをすり合わせ、授業計画、学生募集、実施のアレンジなどを行ってもらった。なお、早稲田大学側のコースで、研修生は事前に授業計画を練り、本プログラムの研修中、学生の能力に合わせて、募集ポスターや授業内容の微調整を本プログラム教員と相談しながら行うという形で進められた。模擬授業は、いわゆる日本語能力を伸ばす授業（例：「接続詞」「ピアラーディング（絵本を読む）」のほか、本プログラムでは通常行いにくい内容のもの（例：「料理体験（お好み焼き／手巻き寿司を作る）」や、日本在住学生という立場や留学生としての経験を活かしたもの（例：「ヘアスタイル（日本で流行のヘアアレンジをやってみる）」「漢字ワークショップ（留学生が担当）」など多種多様な模擬授業が実施され、本プログラム学生たちにも好評であった。

このような多種多様な模擬授業は、本プログラムにおいては学生、教師共々にとって文化交流としての意味合いも持つ。特に教師以外の日本人と話したことがない初級学生にとっては学習意欲を高める効果がある。また、日本を離れシンガポール在住歴が長い現場教師にとっては、研修生の柔軟なアイディアに刺激される一方で、研修生の考え方、話し方、やること全てが伝える「今」の「日本」を知るという役目も果たす。それは、現場教師には真似のできない、研修生としての存在価値を生む。

2.3 成果と課題

研修生受け入れに関し、成果として挙げられるのは、研修が進むにつれ、研修生（特に日本人研修生）が、現場をどう捉え、現場にどう入っていくかに対する考え方、態度、行為に変容が見られた点である。過去二年間の研修では、一、二週目には、研修生の既知の考え方・やり方・物の見方と現場との違いに混乱・葛藤が見られた。二週目後半から三週目には、現場や現場での教師が置かれた状況、学習者の学習スタイルなどの理解が進み、「こんな考え方、やり方もあるのか」と現場側に立った新たな見方ができるようになり、

そこで自分は研修生として何が出来るかを主体的に考えるようになった。それは、例えば、研修生たちの日本語学習者への話し方が、学生の理解可能な語彙や表現にコントロールされたものに自発的に変容したことから推察できる。他にも、授業見学と言えども、ペアワークの相手役として参加したことで、見学で「見える」ものや感じ方が異なったという気づきも見られた。こうした研修生からの教師への率直なフィードバックや変容を間近で見ると、現場教師にとっても自分のやり方を改めて見直す有用な機会にもなる。研修生の詳細な見学でのフィードバックによって、「他者の目」から自分の実践や現場について振り返る機会を生んだ。これは、普段現場に埋没しがちな教師にとっては、貴重な学びの機会となった。

一方で、問題点もある。研修生が望む本プログラム教員からの「指導」と、本プログラム教員が理解する「指導」との間に齟齬が生じている点である。研修生側は、事前にもっと本プログラム教員から内容に関する「具体的指導・指示」が欲しかったと考える一方、本プログラム教員側は、現場を見なければ現場に合った「アドバイス」（本プログラムが考える「指導」の実質的内容）はできないと考える。その上、現場では教育業務に忙殺され、時間的に研修に時間を割くことは難しい。これは、「海外日本語教師研修」とは何を、だれが、どんな風に、何を目指してすることなのかについて、どこまで研修送り出し側と受け入れ側が責任の範囲と中身を明確にし、相互理解を得られるかという海外日本語教師研修の本質を問うている。

しかし、何をどの程度重視するかは、各日本語教育機関ごとに、また各機関が位置づく社会・政治・文化的状況によって異なる（例えば横溝、迫田、松崎 2005）。そのため、海外日本語教師研修の今後の課題は、まず、研修生側がどんな日本語教師を目指しているのか、また、現場側ではどのような教師力を必要としているのか、の両面から考える必要がある。それを踏まえて海外日本語教師研修にはどのような内容、やり方が最も効果的か、海外研修派遣・受け入れ側双方が様々な研修実施国や教育機関の視点で、様々な立場から（研修送り出し側、受け入れ側、研修生）継続的に情報交換をしていくことが課題であろう。

3. 短期日本語集中プログラムに関する報告と提案

3.1 参加者への事後アンケートに基づく報告

短期日本語集中プログラムには、2013年には14名、2014年には19名の学部生が参加した。プログラム終了後に当センターで実施したアンケートを見ると、二年ともに概ね参加者にとって充実した経験になったようだ。東京での生活や宿泊所の環境や施設などについては大半の参加者が満足していたようである。しかし、3週間であったためか、派遣期間については短いとの声が多く見られた。もちろんこれは楽しく、充実したプログラムであったからということもあるのだろうが、細かく見ていくと、それだけでもないということが見えてくる。「過密スケジュールで、その他の活動に費やす時間が少なかった」、「友だちランチセッションが短すぎて、なかなか思ったような交流ができなかった」など授業数が多く、昼食の時間などが短いことについてのコメントも少なくなく、派遣期間が短い

という意見に関連させ、同じスケジュールであれば、4週間程度でこなすのが適当なのではとの意見も見られた。内容の濃いプログラムであった反面、自由な時間や、交流、文化活動に費やす時間などが期待していたほど持てなかった様子が窺われる。それを裏づけるように文化活動やそのバラエティーについても他項目に比べ、比較的評価が低くなっている。お茶や箱根旅行などの具体的な経験について好意的な意見があるものの、全体的に「十分な文化活動の機会がなかった」、「より多くの文化活動に参加したい」といったような意見が見られた。また、留学費用についても、他項目に比べ比較的学生の満足度が低いことがわかる。これについてもプログラムの内容（文化活動の機会、多様性なども含め）、派遣期間が短いという意見に関連があるとも考えられる。

また、プログラムを通しての他国／他大学の学生との交流に関しては、もちろん好意的な意見もあるものの、「期待していたほど日本人との交流機会がなかった」というような意見が比較的多く垣間見られる。アンケートの質問では「SEND プログラムを通して友だち（日本人を含め）ができましたか。」と問いているため、数字上の統計にはそれほどはっきりと見えてはいないが、コメントを詳しく見ていくと、「他国／他大学からの学生との交流機会は十分にあったが、早稲田の日本人学生や日本人との交流機会は少なかった」、「バディーシステムなどがあれば、もう少し日本人と友達になる機会があったのではないか」、「楽しいプログラムであったが、より多くの交流の機会があればもっとよい」、「早稲田大学のサークル活動などに参加する機会を短期の留学生にも与えてほしい」などのコメントが目立つ。さらに「現地日本人との交流機会が限られていた」、「日本語学習に絡めて、現地日本人と交流できるような機会やネットワーキングの提供があれば望ましい」などのコメントも見られ、日本人学生との交流に加え、地域交流などのより自由度の高い交流を希望しているとも理解できる。同時に、他大学の学生との学習を好むかという質問にも他項目に比べ比較的低い点数をつけている傾向が見られる。これも上記の意見に加え、SEND プログラム参加学生がむしろ日本の大学生／日本人との交流をより期待していることの現われだと捉えることができる。

3.2 より魅力的な日本語集中プログラムへの提案

本プログラムでは、早稲田大学の他にも学生を派遣している大学が数校あるが、その中には、交流活動に単位を与えるようなシステムを作るなどして、留学生と現地日本人学生とのバディーシステムなどが確立されており、日本人学生とプログラム参加学生との交流がかなり密に行われているところがある。また、本プログラムにおいてもシンガポールにある日本人学校や日本の大学からの学生グループ、日系企業などと協働して大規模な交流活動を行っているが、成績や単位に関連した活動としてカリキュラムに綿密に組み込むことにより、かなり踏み込んだ活動ができるよう工夫を凝らしている。例えば、それぞれの学生が日本語を使って決まったテーマについてプレゼンテーションをした後、意見交換をしたり、大学のキャンパスを自分たちの作成したキャンパスガイドを基に日本語で案内したりする、などである。また、英語学習を目的として訪問してくる日本人学生は英語で発表し、日本語学習者は日本語で発表し、質疑応答は両言語を駆使して行うなどという活動を通して、双方の目的に見合った協働学習を行っている。

早稲田大学のような外国人留学生の珍しくない大学へ訪問する外国人学生が、現地日本人や学生との活発な交流を実現するには、そのような交流を後押しするような早稲田大学側の更なるお膳立て、例えば、交流活動や派遣学生との話し合い等を必須活動内容・評価項目として含めた科目の開講のような仕組みづくりが必要なのではないだろうか。交流活動を通し、留学生と現地学生とのより深い相互理解を期待し、延いてはグローバルな舞台で活躍できる人材を育成できるようなプログラムの確立を目指すのであればなおさらであると言えよう。

4. おわりに

グローバル化が急進し、教育の垣根もなくなりつつある現在、大学では、人的ネットワークの形成による相互理解や友好関係の深化が求められている。特に、少子化が本格化している現在、将来の日本の経済活動を支えていくためには、留学生の拡大やグローバル人材の育成が必要（経済産業庁2009）であり、日本の大学はそれを目指して多大な努力をしていることが、近年の当学への訪問校や訪問者数の急増から容易に理解できる。しかしながら、最近の国際化への推進のあり方には危惧を感じざるを得ない。日本の思惑とは逆に、シンガポールをはじめとする ASEAN 諸国の学生たちは、日本の大学よりも欧米の大学を好む傾向が強くなってきているからである。その理由は、多くの日本の大学が英語で授業を行うことに重きを置くあまり、日本語が学習できる環境が保障されなくなった、とか、英語で授業を行うと言いながらもディスカッションのできるような十分な英語力を備えた教授陣や学生が少ないのなら、欧米の大学へ行った方が充実した学習ができるという見方が強まってきたからである。日本への思い入れが深く、日本語を専攻して日本語学習に多大な努力や時間を費やし、英語を得意としない学生であればなおさらのことであろう。留学生を惹きつけられるような魅力ある大学にするには、何が本当に必要であるかを今一度考えるべきではなかろうか。そのような観点から見ると、日本語教育者を目指す学生に海外の大学での実習経験を与えることにより、日本語教育の更なる発展に寄与し、海外からの日本語学習者には日本語学習機会を提供するという SEND プログラムは極めて意義の高いプログラムであると言える。とはいえ、SEND プログラムを通して、全く異なる環境にある海外の大学の教員同士が、そして学生同士が協働していくためには、超えなければならない壁がいくつもあること、そして、充実したプログラムを実施するためには相互理解が必要であること、また、そのためには十分な対話が必要であること、などという問題も痛感してきた。しかしながら、それを実感できることこそが、相互発展と国際化への第一歩であると捉え、今後もより充実した協働を行い、最大限の成果が得られるよう努めていきたい。

注

- 1 うおーかー・いずみ（シンガポール国立大学語学教育研究センター）
- 2 さいとう・ゆきこ（シンガポール国立大学語学教育研究センター）

- 3 はまさき・ゆずる（シンガポール国立大学語学教育研究センター）
- 4 <http://www.fas.nus.edu.sg/cls/>
- 5 <http://e-flt.nus.edu.sg/>
- 6 <http://www.fas.nus.edu.sg/cls/CLaSIC/clasic2014/>

参考文献

- 経済産業庁（2009）「グローバル人材」に求められる能力・資質とその育成手法の検討について
（http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/global_jinzai.htm）
- 横溝紳一郎（2002）「日本語教師の資質に関する一考察—先行研究調査より」『広島大学日本語教育研究』（12）、49-58 頁．
- 横溝紳一郎・迫田久美子・松崎寛（2005）「教育実習」『講座・日本語教育学 第4巻 言語学習の支援』スリーエーネットワーク、25-51 頁．